

看護大学1年次における「フィジカルアセスメント」の授業評価と課題

Class Evaluation and Adjustment for "Physical Assessment"
in the First Year of College Nursing Program

松永 早苗¹⁾*, 今井 恵¹⁾, 千田 美紀子¹⁾, 井上 美代江¹⁾,
Sanae Matsunaga, Megumi Imai, Mikiko Senda, Miyoe Inoue,
辻 俊子¹⁾, 上野 範子¹⁾, 森下 妙子¹⁾
Toshiko Tuji, Noriko Ueno, Taeko Morishita

キーワード 看護大学1年次生, フィジカルアセスメント, 授業評価

Key Words first grader of nursing college, physical assessment, class evaluation

抄 録

背景 医療の高度化に伴い、看護師の高い判断能力と医療チームをまとめていく調整能力が求められており、看護学教育では、「フィジカルアセスメント」を強化することが必要とされている。A大学看護学部（以下本学）は、2011年度に開設し、シラバスの調整上「フィジカルアセスメント」は、1年次前期に開講している。また、学生のレディネスに配慮し、「人体の構造と機能」と「フィジカルアセスメント」を関連付けた授業を試みている。

目的 2011年度前期に行った「フィジカルアセスメント」の授業方法と内容、開講時期について検討し、課題を明らかにする。

方法 本学1年71名を対象に、研究の倫理的配慮を説明し、承諾の得られた学生に、授業過程評価スケール尺度（看護学講義用）を基に作成した質問紙調査を行った。

質問紙の内容は、授業の展開に関する7項目と学生主体のプレゼンテーションに関する5項目を5段階で評価した。

結果 質問紙調査の結果は、授業の展開を問う7項目の平均は、7項目中6項目は3.9以上であった。最も評価が低かったのは、「専門用語に対してわかりやすい説明であった」が、平均3.5であった。学生が主体となって行ったプレゼンテーションに関する評価5項目の平均は、5項目中3項目は3.9～4.0であった。最も低かったのは「自分の意見を発言できた」3.5で、次に低かったのは「発表後の達成感があった」3.6であった。

考察 質問紙調査で授業の展開に関する7項目中6項目が3.9以上であり、授業に興味をしめしていた。プレゼンテーションでは5項目中3項目に3.9以上の結果から、学生のレディネスを考え、「人体の構造と機能」を学生主体のプレゼンテーションとして授業に導入したことで、積極的に事前学習に取り組んだ結果であると考えられる。また、「人体の構造と機能」を事前学習することで、「フィジカルアセスメント」の学習目標が明確になり、授業の展開に対して肯定的な評価を得た。一方、授業の展開を問う項目の「専門用語に対してわかりやすい説明であった」が3.5と低かったのは、医療の専門用語について十分に学べていない時期であると考えられる。さらに、プレゼンテーションに関する評価の「自分の意見を発言できた」と「発表後の達成感があった」が3.5、3.6と低かったのは、「人体の構造と機能」が「フィジカルアセスメント」の授業に必要なと考えられない学生がいたためだと考える。

結論 本学での「フィジカルアセスメント」を効果的に実施するには、学生のレディネスを考えた開講時期を考慮し、教科書の選定や授業内容を再検討する必要がある。

Abstract

Background Due to the medical advancement, it is now more important than ever to educate the nurses to have the ability to make good judgment, make adjustments quickly, have solid leadership, and perform stronger “physical assessments” in the nursing science education program. Therefore, in 2011 I have added the material on “physical assessments” in the course for, “Human body function and structure”, which is a course taught to the first graders in the first trimester.

Purpose The goal is to evaluate the “physical assessments” form students in class of 2011 based on their knowledge and performance.

Methods A class evaluation survey with a standard evaluation scale (5 pts scale) was given to all 71 students. The contents of the survey consisted 7 questions of developments of the class and 5 questions about students' presentation with five stages.

Results On the survey, 6 out of 7 scored higher than 3.9 pts on average for the 7 questions. The lowest scored question was, “The definitions for technical terminology were easy to understand”. However, the average score was 3.5. As for the 5 questions, 3 out of 5 scored an average of 3.9-4.0 pts. The lowest scored question was, “I

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 School of Nursing, Seisen University

* E-mail : matsun-s@seisen.ac.jp

was able to state my opinion”, which scored 3.5 pts. The second lowest question was, “I felt accomplished after doing the presentation” with the score of 3.6 pts.

Discussion In overall, the students showed interest in the class “physical assessments”. Students especially showed interest in using the medical instruments. By experimenting with equipment first hand helps the students to gain experience and feel comfortable the tools. Unfortunately, as much as this class was efficient, it seems that teaching “physical assessments” to the first graders is too early. The material for the course is too advanced for many of the students to understand the terminology and lectures. Thus, teaching the course to upper classmen will have a better result and many of the students will be able to absorb the material faster and easier and more likely be able to utilize the new knowledge in the future.

Conclusion In 2012, the course “physical assessments” changed from being taught to the first grader to a later semester and the material has been reviewed and adjusted to a first grade level.

I. 緒 言

「フィジカルアセスメント」とは、身体の頭部から足先まで系統別に査定して、身体の問題を捉えることである。看護において、「フィジカルアセスメント」が注目されたのは、医療の高度化に伴い、医師の診療の補助以外に期待される看護師の医療に対する判断能力や、1970年代に米国で育成された医師の診断技術を実践できるナースプラクティショナーの影響がある。「フィジカルアセスメント」を看護に活かすためには、看護師の高いアセスメント能力と医療チームをまとめていく調整能力が求められる。このような役割の変化に応じ、看護学カリキュラムの在り方が検討された（厚生労働省，2007）。その結果、基礎看護学に「フィジカルアセスメント」をいれた身体のアセスメント能力を強化した教育を行う方針が示された（厚生労働省医政局，2011）。

2011年度に開設したA大学看護学部（以下本学）は、シラバスの調整上、基礎看護学「フィジカルアセスメント」1単位を1年前期に開講した。「フィジカルアセスメント」を学ぶには、「人体の構造と機能」を理解していなければ身体の観察だけに終わり、アセスメントができない。それらを考慮してか、「人体の構造と機能」を学び始めたばかりの看護大学1年次前期に、「フィジカルアセスメント」を開講する看護大学は比較的少ない（大島，2005）。

そこで、本学では、看護大学に入学して間もない学生のレディネスを配慮し、「人体の構造と機能」と関連付けた授業を試み、学生から授業評価を得た。本研究の目的は、2011年度前期に行った「フィジカルアセスメント」の授業方法と内容、開講時期について検討し、課題を得ることである。

II. 研究方法

1. 研究対象

A大学看護系大学生1年71名のうち研究の倫理的配慮を説明し、承諾の得られた71名を対象とした。

2. 調査時期

2011年4月から7月のフィジカルアセスメントの授業を対象に行った。調査は、7月26日のフィジカルアセスメントの授業が終了した後の教室内で実施した。

3. 調査方法と内容

授業過程評価スケール尺度（看護学講義用）（舟島，2009）を基に作成した質問紙調査（表1）を使用し、授業評価を実施した。質問紙の内容は、授業の展開に関する7項目（①授業の目的は明らかであった、②授業の内容は理解しやすかった、③専門用語に対してわかりやすい説明であった、④授業内容に興味をもてた、⑤授業の進め方は適切であった、⑥授業内容のポイントがわかった、⑦授業の締めくくりは適切であった）と学生主体のプレゼンテーションに関する5項目（①授業の内容理解に役立った、②準備を積極的に行った、③自分の役割を果たすことができた、④自分の意見を発言できた、⑤発表後の達成感があった）を5段階（1：当てはまらない、2：余り当てはまらない、3：当てはまる、4：大体当てはまる、5：かなり当てはまる）で評価した。

4. 授業内容と方法

授業方法と進め方（表2）は、初回から第7回までフィジカルアセスメントの概念及び方法について教員が主体となり授業を展開した。第8回以降の授業は、フィジカルアセスメントに必要な「人

表1 質問紙

| 実施日：2011年7月26日 | | | 当てはまる かなり | 当てはまる 大体 | 当てはまる | 余り当て はまらない | 当て はまらない |
|----------------|----|-------------------------------|--------------|-------------|-------|---------------|-------------|
| カテゴリ | 番号 | 評価項目 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 授業の展開 | 1 | 講義の目的は、明らかでしたか | | | | | |
| | 2 | 講義の内容は、理解しやすかったですか | | | | | |
| | 3 | 専門用語やなじみのない用語に対してわかりやすい説明でしたか | | | | | |
| | 4 | 講義は、興味をもって受けることができましたか | | | | | |
| | 5 | 講義の進め方は、適切でしたか | | | | | |
| | 6 | 講義内容のポイントは、わかりましたか | | | | | |
| | 7 | 毎回の講義の締めくくりは、適切でしたか | | | | | |
| プレゼンテーション | 1 | 授業内容の理解に、役立ちましたか | | | | | |
| | 2 | 準備には、積極的に参加しましたか | | | | | |
| | 3 | 自分の役割を、果たすことができましたか | | | | | |
| | 4 | 自分の意見を、発言することができましたか | | | | | |
| | 5 | 発表後に、達成感がありましたか | | | | | |

表2 授業方法と内容

| 授業回数 | 授業内容と進め方 |
|---------|---|
| 第1回~7回 | <p>「フィジカルアセスメント」概論について、教員が主体となり講義する</p> <p>第1回 授業オリエンテーション、～視診～体験学習 第2回 フィジカルアセスメントとは、問診に必要なコミュニケーション 第3回 フィジカルアセスメントの情報収集・観察・記録 第4回 視診・触診・打診・聴診 第5回 一般状態・バイタルサインズとは 第6回 フィジカルアセスメントに必要な標準予防策・感染経路別予防策 第7回 標準予防策の実際（演習）</p> |
| 第8回~14回 | <p>① 「人体の構造と機能」 器官系別に担当グループを決め、学生主体でプレゼンテーションする</p> <p>② 「器官系別フィジカルアセスメント」 教員が説明後に、グループごとに演習を行う</p> <p>※「人体の構造と機能」のシラバスと「器官系別フィジカルアセスメント」は連動させた</p> <p>第8回： 運動系のプレゼンテーション 運動系のフィジカルアセスメント 第9回： 感覚器系のプレゼンテーション 感覚器系のフィジカルアセスメント 第10回： 消化器系のプレゼンテーション 消化器系のフィジカルアセスメント 第11回： 中枢系のプレゼンテーション 中枢系のフィジカルアセスメント 第12回： 呼吸器系のプレゼンテーション 呼吸器系のフィジカルアセスメント 第13回： 循環器系のプレゼンテーション 循環器系のフィジカルアセスメント 第14回： 状況設定問題</p> |
| 第15回 | まとめ |

体の構造と機能」を器官系別に担当するグループにわけ、学生が主体となりグループワークを行い、担当する器官系が身体の中のどの部分に属しているかをまとめた「構造」と身体でどのような役割をしているのかをまとめた「機能」を中心にプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの後には、再度「人体の構造と機能」の内容の補足とポイントを整理し、学生間での知識の共有を図った。そして、プレゼンテーションの後には、器官系別にフィジカルアセスメントの演習を行った。器官系別フィジカルアセスメントの授業における順序は、「人体の構造と機能」のシラバスと連動させた。

5. 本学1年次生のカリキュラム

本学1年次生のカリキュラムの内容は、表3の通りである。

6. 倫理的配慮

本学研究倫理委員会の承認（倫理委員会承認番号12）を得て、研究の目的や方法、匿名性の保証とプライバシーの保護、研究への自由参加につい

て口答で説明した。また、調査内容は、授業評価に影響しないことを説明し、質問紙を配布後に研究者は退出し、調査用紙回収ボックスを教室の後ろに置き回収した。回収した質問紙は、研究代表者のもとに管理し、厳重なアクセス権限の管理制御のもとに保管し、データ処理後は切断機で切断処理を行った。

III. 結果

質問紙の回収は、71名に配布し、回収率は100%であった。

質問紙調査の結果は、授業の展開を問う7項目の平均は、以下となった（図1）。「①授業の目的は明らかであった」4.3、「④授業内容に興味をもてた」4.1、「②授業の内容は理解しやすかった」4.0、「⑤授業の進め方は適切であった」4.0、「⑥授業内容のポイントがわかった」3.9、「⑦授業の締めくくりは適切であった」3.9の順で評価が良く、7項目中6項目は3.9以上であった。最も評価が低かったのは、「③専門用語に対してわかりや

表3 2011年度1年次生のカリキュラム

| | 科目区分 | 単位数 | 前期 | 後期 |
|------|---------------|-------------------|---|---|
| 教養科目 | 人間の理解 | 2単位必須 2単位以上選択 | 人権論・心理学概論 教育学概論 対人コミュニケーション論 | 人間発達論 |
| | 社会・地域の理解 | 4単位以上 選択 | 憲法 社会学概論 | 社会心理学 |
| | 科学的思考の基礎 | 4単位以上 選択 | 自然科学の発展 環境と生物 科学 情報処理入門 | 情報処理演習 |
| | 語学 | 2単位以上 選択 | 大学基礎英語 A Communication English A | 大学基礎英語 B Communication English B |
| | 保健体育 | 2単位以上 選択 | スポーツ実技 A | スポーツ実技 B |
| 専門科目 | 人間の心身と健康障害の理解 | 23単位必須 2単位以上選択 | 人体の構造と機能Ⅰ 人体の構造と機能Ⅱ（通年） フィジカルアセスメント | 人体の構造と機能Ⅲ 微生物学、病理学 人間関係論 保健統計学 |
| | 基礎看護学領域 | 82単位必須 | 基礎看護論Ⅰ 生活援助論 医療安全・倫理 | 生活援助技術論Ⅰ |
| | 臨床看護学領域 | 6単位以上選択 | | 成人看護論 老年看護論 |
| | 臨地実習 | | 基礎看護学実習Ⅰ | |

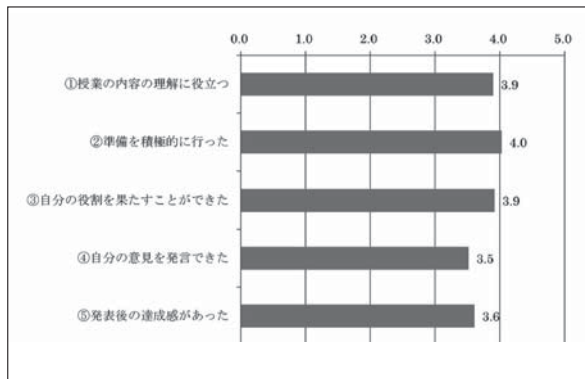


図1 授業の展開を問う7項目

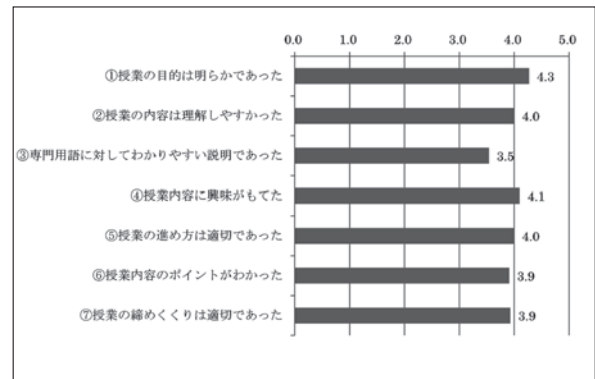


図2 学生主体のプレゼンテーションに関する5項目

すい説明であった」で、平均3.5であった。

次に、学生が主体となって行ったプレゼンテーションに関する評価を問う5項目の平均は、以下の結果となった(図2)。「②準備を積極的に行った」4.0、「①授業の内容の理解に役立つ」3.9、「③自分の役割を果たすことができた」3.9の順で評価が良く、5項目中3項目は3.9～4.0で特に差はなかった。最も低かったのは「④自分の意見を発言できた」3.5で、次に低かったのは「⑤発表後の達成感があった」3.6であった。

IV. 考 察

今回の質問紙調査の結果は、授業の展開を問う7項目と学生が主体となって行ったプレゼンテーションに関する評価を問う5項目ともに、3.5～4.3の授業に対する評価を得ることができた。先行研究では、積極的に事前学習した学生は、授業に満足しているという結果が得られている。加えて、学生にとって学習する目標が明確でそれにあったテキストや進度が提供され、わかりやすい授業が行われることが授業の満足度につながると報告されている(關戸, 2008)。質問紙調査で授業の展開に関する7項目中6項目が3.9以上であり、授業に興味をしめしていた。このことは、様々な医療用具を使用する「フィジカルアセスメント」は、医療職に近づける楽しさがあると推測される。プレゼンテーションでは5項目中3項目に3.9以上の結果から伺えることは、看護大学1年次前期の学生のレディネスを考え、「人体の構造と機能」を学生主体のプレゼンテーションとして授業に取り入れたことで、学生個々が積極的に事前学習に

取り組んだ結果であると考えられる。また、器官系別の「人体の構造と機能」の知識を学生同士が共有したあとに、器官系別フィジカルアセスメントの演習を行ったことで、「フィジカルアセスメント」の学習の目標が明確になり、授業の展開を問う7項目でも肯定的な評価を得られた。

一方、授業の展開を問う項目の「③専門用語に対してわかりやすい説明であった」は、3.5と低かった。これは、高等学校を卒業したばかりの学生で医療の専門用語について十分に学べていない時期に、専門性の高い「フィジカルアセスメント」を学んでも、授業中には医療用語の意味を理解するまでに至らなかったと考える。さらに、プレゼンテーションに関する評価を問う項目の「④自分の意見を発言できた」と「⑤発表後の達成感があった」では、3.5、3.6と低かった。これは、看護大学1年次前期の学生の中には、「人体の構造と機能」が「フィジカルアセスメント」の授業に必要であると理解できないまま、授業を受講することになったのではないかと考える。これらの学生のレディネスを考慮してか、先行文献で「フィジカルアセスメント」を看護大学2年次に開講する大学が多かった(大島, 2005)。したがって、本学では、カリキュラム上の変更が可能な1年次前期よりも1年次後期に「フィジカルアセスメント」を開講することが望ましい。

看護師が行う「フィジカルアセスメント」は、単に身体を頭部から足先まで査定だけではなく、得た事実を看護過程に活かし看護を実践するために行う。医師が医療行為を行う「フィジカルアセスメント」と区別するべきである。これまでも、看護師が行う「フィジカルアセスメント」の授業

内容や方法について多くの先行研究がなされている。それらは、「看護過程」と「フィジカルアセスメント」の授業を連動させた授業（竹内, 2011）や、看護学部全体のゼミ式の演習として「フィジカルアセスメント」を展開している（深田, 2008）。さらに、各看護大学によっては、学生のレディネスを考えた「フィジカルアセスメント」の開講時期や単位数が異なっている（大島, 2005）。

したがって、本学での「フィジカルアセスメント」をより効果的に実施するには、学生のレディネスを考え年次を越えた「フィジカルアセスメント」の開講時期や単位数を考慮する必要がある。カリキュラム上、1年次の開講がさけられなければ、教科書の選定や授業内容を再検討する必要がある。

今回の質問紙調査の回答率が100%であったことは、倫理的配慮を行ったが、授業終了後の教室で調査を行ったことや、調査時期が関与したと考えられる。今後は、よりいっそうの倫理的な配慮を検討することが望ましい。

V. 結 論

2011年度の「フィジカルアセスメント」の授業評価の結果において、学生主体で行う「人体の構造と機能」のプレゼンテーションを取り入れた授業方法は、「フィジカルアセスメント」の授業の展開に肯定的な評価をもたらしたと考えられる。しかし、「フィジカルアセスメント」の授業を開講する時期を見直す必要がある。2012年度は本学のシラバス上で調整できる1年次前期から1年次後期へ変更された。さらに、看護に必要な「フィジカルアセスメント」を教育するために、今後も授業教材と内容を検討することが課題である。

文 献

大島弓子, 門井貴子, 佐藤美紀 (2005) : 基礎看護学におけるヘルスアセスメント/看護アセスメント・看護技術・臨地実習の教育の実態, 愛知県立看護大学紀要, 11, 41-49.

舟島なをみ (2009) : 看護実践・教育のための測定用具ファイル—開発過程から活用までの実際— (第2版), 医学書院.

關戸啓子, 安原由子, 高井恵美 (2008) : 「ヘルスアセスメント」に対する看護学生の授業満足度に影響を与える要因, 看護教育, 39, 220-222.

竹内貴子, 前田節子, 桂川順子 (2011) : 看護過程と連動させたフィジカルアセスメント教授方略の展開—フィジカルアセスメント情報を看護情報として活用する—, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 6 (1), 55-64.

深田美香, 伊藤靖代, 内田宏美 (2008) : 看護学教育におけるヘルスメント授業の学生による評価—A大学における5年間の取り組み—, 日本看護学教育学会誌, 18 (2), 51-61.

今本喜久代, 北村文月 (2004) : 解剖生理学を基盤としたフィジカルアセスメントの看護学教育への導入, 形態・機能, 3 (1), 7-16.

金谷悦子, 村上みち子, 山下暢子 (2006) : 看護基礎教育におけるアセスメント技術教育研究の動向—過去5年間のフィジカルアセスメント技術教育研究に焦点を当てて—, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 1, 35-49.

荻原康子 (2011) : フィジカルアセスメント教育の全体構想および展開した授業内容の報告, 東京医科大学看護専門学校紀要, 21 (1), 43-51.

厚生労働省 (2007) : 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書.

看護教育の在り方に関する検討会 (2004) : 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標, 文部科学省高等教育局医学教育課.

看護教育の在り方に関する検討会 (2002) : 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 文部科学省高等教育局医学教育課.

厚生労働省医政局 (2011) : 看護師等養成所の運営に関する指導要領.